

やさしく学ぶ 保育の心理学 I・II

浜崎隆司・田村隆宏・湯地宏樹 編著

Takashi Hamazaki, Takahiro Tamura, & Hiroki Yuji

ナカニシヤ出版

図表3-1 いろいろな発達段階

年齢	一般的な発達段階	ルソー	ピアジェ	コールバーグ (道徳判断)	フロイト
1	乳児期	第1段階 乳児期 感覚的判断	第1段階 感覚運動的期	第1段階 認知段階1 可逆性の獲得	口唇期
2					
3	幼児期	第2段階 乳児期 知覚的知覚的判断	第2段階 前操作 知覚的知覚的期	第2段階 認知段階2 終極的出題	肛門期
4					ヒップス期
5					
6					
7	児童期	第2段階 知覚的知覚的判断	第2段階 知覚的知覚的期	第2段階 認知段階2 終極的出題	潜伏期
8					
9					
10					
11	青年期	第3段階 知覚的知覚的判断	第3段階 具体的操作期	第3段階 認知段階3 可逆性 (他者)への 関心 (他者)に 関心 (他者)に 関心	思春期 (生殖器期)
12					
13					
14					
15	成人期	第4段階 知覚的知覚的判断	第4段階 形式的操作期	第4段階 認知段階4 可逆性 抽象的 論理的 思考 の 能力 の 獲得 の 能力 の 獲得 の 能力 の 獲得	
16					
17					
18					
19					
20					
21					
22					
23					
24					
25					

(注) 本表は、クレイン、W.C.著 小林・中島訳「発達の理論」を参考に作成した。年齢区分は、あくまでも目安であり、確定的なものではない。

(出所) 田中未来他編『子どもの教育と福祉の事典』建帛社、1992年、43頁

2. 発達についての理論

発達については、様々な考え方がありますが、代表的な4つの発達理論について紹介します。

(1) フロイトの性的発達段階説

フロイト (Freud, S., 1905) は、リビドーという性的エネルギーの満足の程度がそれぞれの発達段階でいろいろな形で現れ、満たされていくことを主張しています。それぞれの発達段階でリビドーが満足されるかどうか、発達のカギになるということです。ですので、いずれかの段階においてリビドーが十分に満たされないと、子どもは次の段階へ進むことができず、大人になっても、満たされなかった段階に影響される独自の未熟な人格が現れると説明するのです。

①口唇期 (0歳～1歳半)

口唇とは唇のことです。この時期は、母親のお乳を吸うこと、すなわち唇の役割に大きな意味があります。母親のお乳を吸って栄養を補給するのですが、その時に乳首を吸うことで一種の性的満足を得ているのです。その何ともいえない心地の良さによって、リビドーが満たされます。リビドーの満足こそが、次の段階にスムーズに移る大切な条件になります。

②肛門期 (2歳～3歳)

肛門期という言葉に抵抗を覚えるかもしれませんが、文字通りウンチをする行為と関連があります。ウンチをする時に快感を得たり、ウンチすることを我慢することで快感を得られます。それはまた親と自分を関係づけるものでもあります。つまりこの時期のキーワードは「しつけ」です。トイレのしつけが、厳しすぎると排泄することがいけないことと思われ快感が得られないこととなります。トイレのしつけだけでなく、親にあれこれと教え込まれる時期なので、厳しくしつけられるとリビドーは満足されず、出したいのに出してしまうことがいけないという考え方が残ります。

③男根期 (4歳～5歳)

性器にリビドーが集まるこの時期は、男女の違いに関心が向きます。「自分の体にペニスがあるのに、女の子にないのはなぜだろう」というように子どもなりに感じるようになります。この時期は、異性の親を愛して、同性の親をライバル競争相手として憎むこともあります。これは、エディプス・コンプレックスといわれます。性器やセックスに関心を向けることをいけないこととして厳しくしつけると、成長してから異性関係で悩むなどの影響が出る場合もあります。

④潜伏期 (6歳～11歳)

性の欲求は表に出ることもなく隠れたままで、社会のルールや知識などの学

リビドー

精神分析の用語。フロイトによれば、もともと性本能を発現させるエネルギーで、性的快感を求める性質を持つものであるが、様々な欲求に変換可能な心的エネルギーでもある。

エディプス・コンプレックス

フロイトによる精神分析の概念の一つで、エディプス葛藤ともいう。3歳から5歳くらいの子どもの異性の親に対して愛情を感じ、同性の親にライバル心を感じる状態をいう。

習や知的活動にエネルギーが注がれます。性への関心は穏やかな時期といえます。

⑤性器期（12歳以降）

大人の性や愛が芽生えます。幼児的な自己中心的な愛から、愛する人のために自分を犠牲にするといった最終的な性の形へと変化します。

(2) エリクソンの心理社会的発達理論

エリクソン (Erikson, E. H., 1959) の発達理論は心理社会的発達理論といわれています。人生を8段階に区分して、それぞれに望ましい発達の課題と心理社会的危機 (psychosocial crisis)、大切な人間関係が設定されています (表1-1)。エリクソンの理論は、表1-1に示されるように人は8つの発達段階を通過していくと考えています。それぞれの発達の段階には宿題があるようなものです。そこでの発達の課題の成功や失敗は、次の段階の達成に大きく影響を与え、また、各課題において、できるだけより多くの成功体験を持つことが大切であると強調しています。

表1-1 エリクソンの社会心理的発達の全段階 (Erikson, 1959)

年 齢	心理社会的危機	結 果
誕生から 1歳半まで	基本的信頼 対 不信	(+) 他者と環境からの支持による信頼の感情の醸成。
		(-) 他者に対する恐怖と不安。
1歳半から 3歳まで	自律性 対 羞恥、疑惑	(+) 自己の能力に対する自信の感情。
		(-) 自己の能力に対する疑い、恥の感情、独立性の欠如。
3歳から 6歳まで	自発性 対 罪悪感	(+) 行為を自主的に始発させる方法を発見。
		(-) 自分の行為が両親などの持つ規範と衝突する場合には罪悪感を持つ。
6歳から 12歳まで	勤勉性 対 劣等感	(+) 自己の社会的・教育的教育に関する自信の発達。
		(-) 達成感の欠如。同年齢の友達との比較の結果、劣等感を持つ。
12歳から 20歳まで	自我同一性 対 同一性拡散	(+) 自己のユニークさと、果たすべき役割の理解。基本的な社会的・職業的アイデンティティの確立。
		(-) 自分の人生における適切な役割に対する無理解と混乱。
20歳から 40歳まで	親密性 対 孤独	(+) 愛情関係、性的関係、親友関係など他人との心理的きずなの形成。
		(-) 他人と心理的關係を持つことに対して恐怖を感じ、孤独感をいだく。
40歳から 65歳まで	生産性 対 停滞	(+) 社会に対する貢献感、仕事の充実と家族の養育。
		(-) 自分の行動をつまらないものとする。不活発で自己中心的。
65歳以上	自我の統合 対 絶望	(+) 自分の人生の到達点に対する統合的な理解と充足感。
		(-) 失われた時と機会に対する悔悟の念。不満と死の予期による絶望感。

習や知的活動にエネルギーが注がれます。性への関心は穏やかな時期といえます。

⑤性器期 (12歳以降)

大人の性や愛が芽生えます。幼児的な自己中心的な愛から、愛する人のために自分を犠牲にするといった最終的な性の形へと変化します。

(2) エリクソンの心理社会的発達理論

エリクソン (Erikson, E. H., 1959) の発達理論は心理社会的発達理論といわれています。人生を8段階に区分して、それぞれに望ましい発達の課題と心理社会的危機 (psychosocial crisis)、大切な人間関係が設定されています (表1-1)。エリクソンの理論は、表1-1に示されるように人は8つの発達段階を通過していくと考えています。それぞれの発達の段階には宿題があるようなものです。そこでの発達の課題の成功や失敗は、次の段階の達成に大きく影響を与え、また、各課題において、できるだけより多くの成功体験を持つことが大切であると強調しています。

表1-1 エリクソンの社会心理的発達の全段階 (Erikson, 1959)

年 齢	心理社会的危機	結 果
誕生から 1歳半まで	基本的信頼 対 不信	(+) 他者と環境からの支持による信頼の感情の醸成。
		(-) 他者に対する恐怖と不安。
1歳半から 3歳まで	自律性 対 羞恥、疑惑	(+) 自己の能力に対する自信の感情。
		(-) 自己の能力に対する疑い、恥の感情、独立性の欠如。
3歳から 6歳まで	自発性 対 罪悪感	(+) 行為を自主的に始発させる方法を発見。
		(-) 自分の行為が両親などの持つ規範と衝突する場合には罪悪感を持つ。
6歳から 12歳まで	勤勉性 対 劣等感	(+) 自己の社会的・教育的教育に関する自信の発達。
		(-) 達成感の欠如。同年齢の友達との比較の結果、劣等感を持つ。
12歳から 20歳まで	自我同一性 対 同一性拡散	(+) 自己のユニークさと、果たすべき役割の理解。基本的な社会的・職業的アイデンティティの確立。
		(-) 自分の人生における適切な役割に対する無理解と混乱。
20歳から 40歳まで	親密性 対 孤独	(+) 愛情関係、性的関係、親友関係など他人との心理的きずなの形成。
		(-) 他人と心理的關係を持つことに対して恐怖を感じ、孤独感をいだく。
40歳から 65歳まで	生産性 対 停滞	(+) 社会に対する貢献感、仕事の充実と家族の養育。
		(-) 自分の行動をつまらないものとする。不活発で自己中心的。
65歳以上	自我の統合 対 絶望	(+) 自分の人生の到達点に対する統合的な理解と充足感。
		(-) 失われた時と機会に対する悔悟の念。不満と死の予期による絶望感。

①乳児期（基本的信頼 対 不信）

何かを信頼するという感覚は、唇でお乳を飲む時に得られるといえます。お腹がすいたら、だれかがお乳をくれて、お腹が満たされ、心も満たされます。授乳は、栄養を補給するという意味ばかりでなく、後の人格の発達の基礎となるということです。ですから、この時期に子どもが、「人は信じてもいいんだよね」というような信頼感が得られるかどうかは乳児期の課題で、その後の人生における人間関係に影響を及ぼします。

②幼児前期（自律性 対 羞恥、疑惑）

この時期になると、幼児は、全身の筋肉が発達してきて、自分で立って歩けるようになり、トイレにも一人でいけるようになります。発達課題としては、排泄のコントロールを通じて自律性を身につけることができるかどうか重要です。うまく排泄ができれば親にほめられ、失敗すると恥ずかしい思いを子どもは体験します。

③幼児後期（自発性 対 罪悪感）

この時期は、身の回りの世界に強い関心を持ち、自分を主張していく積極性と、そういうことをするといけないのではないかという罪悪感が発達の焦点となります。これらの発達の方向によって、積極性に富む子どもになったり、罪悪感の強い子どもになったりすることもあります。

④児童期（勤勉性 対 劣等感）

小学校に通うようになると、子どもは学校でたくさんの知識や技能を身につけます。この時同年齢の友達と自分を比較することで、劣等感が生まれることもあります。勉強して、成果があると、物事を完成させる力とその喜びを感じ、先生や親や周囲の友達から認められ、自分の能力を確信し、自分自身を価値あるものとして見るようになります。この時期に仲のいい友達をつくることも重要です。学校での集団活動は、子どもの社会で生きていく力を養うのです。

⑤青年期（自我同一性 対 同一性拡散）

青年期では性的な関心が一段と高まります。これに基づいて自己らしさの概念ができあがってきます。自分の体の変化と社会で生きていく上での様々な悩みや不安が生じます。この時期には、自分がどんな人間なのか、自我同一性（ego identity）を確立することが課題となります。これに失敗すると自分の人生にふさわしい役割を見失い混乱が起こって同一性拡散（identity diffusion）が生じます。人格が統一されず、社会にうまく溶け込めなくなってしまうのです。青年期には、人は試行錯誤しながら、やがて自分の生き方、価値観、人生観、職業を決定し、社会の中での自分の居場所を見つけなければならないのです。

⑥成人初期（親密性 対 孤独）

この時期の発達課題は、他者との親密さといわれています。例えば、恋人との親密な関係を意味します。性というものを通じて、身も心も一体感を抱くような、大人の愛を体験することです。そこでは、自分と異なる性、肉体をもつ

自我同一性

「自分とは何か」「これからどう生きていくのか」といった問いを自分自身の経験をとおして、自分が、時間や場面が変わっても、同じ意見を持ち、同じ行動を取ることができる人間であると実感すること。

同一性拡散

「自分が何者なのか、何をしたいのかわからない」というように、自我同一性が達成されず、自分の存在意義や価値を感じることができない状態をいう。

相手とお互いに関わっていくということの大切さがわかります。これに失敗すると、孤独が待っています。

⑦成人後期（生産性 対 停滞）

この時期の発達課題は、生産性です。生産性とは、次の世代を育てていくことに関心を持つということです。結婚して子どもを育てることだけでなく、社会的な業績や知的、芸術的な創造もこの中に含まれます。自分自身にしか関心が持てず、自分だけの世界に閉じこもってしまうと、人格の発達がとまってしまい、以後の発達が難しくなります。

⑧成熟期・老年期（円熟期）（自我の統合 対 絶望）

成熟期は、人生を完結する重要な時期ですので、今までの自分のライフワークや生活を総合的に評価し、「自分の人生はよかったな」とまとめることが大切です。うまく自分を評価できれば、心が満たされ、人間的な円熟や平安の感覚が得られます。しかし、この課題に失敗すると、後悔や挫折感を体験することになります。

（3）ピアジェの認知発達理論

スイスの心理学者のピアジェ（Piaget, J., 1936）は、子どもを細かく観察したり、多くの独自の実験や調査を行うことにより、子どものものの見方や考え方（認知機能）についての発達理論を唱えました。ピアジェによると、認知機能は、子どもと子どもを取り巻く環境の相互作用の中で、つくられるとしています。認知機能の枠組をスキーマと呼びます。

スキーマ

スキーマとも呼ばれ、「図式」とか「枠組」の意味である。人が、自己を含む世界を認識する際に利用しているとされる認知的枠組を指す。

例えば、赤ちゃんはお母さんの乳首に口が触れると乳首に吸い付いてお乳を飲みます。この場合、口に触れるものを吸うと、お腹が満たされるというスキーマができます。その後、お腹がすいたら口に触れるというパターンが身につきます。これを同化といいます。つまり、口に触れるものを吸うとお腹が満たされるという簡単なルールが身につくわけです。ところが、毛布が口にふれても吸うという行為が見られます。でもお腹は満たされませんので、口で吸ってもお腹は満たされないこともあることを知ると、それまでの「口で吸ったらお腹が満たされる」というスキーマを変えなければなりません。それを調節と呼ぶのです。すなわち、今までのやり方でうまくいかない時、赤ちゃんであってもこれまでのやり方を変え、もっとうまくいくスキーマを取り入れるのです。この変化の過程を発達と考えます（詳しくは6章pp.55-58参照）。

（4）スキヤモンの発達・発育曲線

図1-2はスキヤモン（Scammon, R. E., 1930）の発育発達曲線といわれるものです。この図では、20歳のところがすべて100%になっています。つまり20歳を身体的に成人とみなし、その時期の値を100として各発達期の相対的な値を示しています。

まず、神経型の発達について見てみましょう。大脳や神経の発達に関する神

経系統は、早い時期に発達し、5歳ごろまでに80%の成長を遂げ、12歳でほぼ100%になります。神経系は、一度その道筋が完成するとなかなか消えません。例えば、幼い時に英語を覚えると、何年間も英語を話さなくても、外国に旅をすると流暢に英語が口から溢れてくるということがあります。5歳くらいまでに、神経系の基礎ができますから、その時期に、物を見たり聞いたり触ったり、遊びでしっかり体を動かしたりすることなどで、神経回路に刺激を与え、神経系の発達を促します。

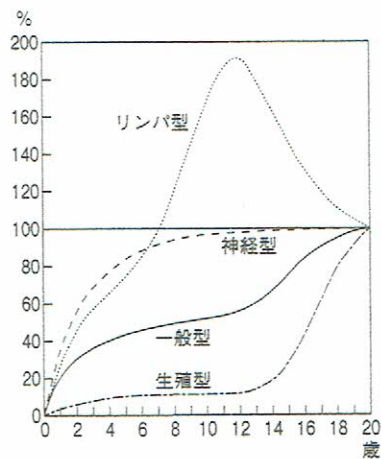


図1-2 スキャモンの発達・発育曲線図
(Scammon, 1930)

一般型は、身長・体重や肝臓、腎臓などの胸やお腹の臓器の発育を示します。乳幼児期まで急速に発達し、その後は次第に穏やかになり、思春期ごろから再び急激に発達します。男女の見かけの違いがはっきりしてきて成人の体つきに発達していきます。

リンパ型は、扁桃、リンパ節などのリンパ組織の発達です。生後から12～13歳までにかけて急激に成長し、大人のレベルを超えますが、思春期を過ぎると大人のレベルに戻ります。

生殖型は男児の陰茎・睾丸、女児の卵巣・子宮などの発育です。小学校までは、成長はゆるやかですが、思春期あたりから急に発達します。男子ホルモンや女性ホルモンなどの性ホルモンの分泌も多くなります。